

学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.31

発行日 ● 平成28年(2016)4月1日

もくじ

ごあいさつ.....	1
幕末京都の学習院.....	2~3
学習院大学所蔵漢籍から見る京都の学習院の教育.....	4~5
京都の学習院の丁祭と論議.....	6
志士たちが集う学習院.....	7
京都の学習院と乃木希典・学習院大学史料館からのお知らせ.....	8



勅額「学習院」(嘉永2年 学習院総務部所蔵)

孝明天皇から学習院へ下賜された勅額。
近衛忠熙の染筆によるもの。これによって「学
習院」の名が定まった。

ごあいさつ

学習院大学史料館では4月2日～5月28日に「幕末京都の学習院」というテーマで展示会を、そしてその関連講座として、大阪経済大学の家近良樹教授による第79回学習院大学史料館講座「京都の学習院—公家・幕府・藩の動向と関連させて—」を5月7日(土)に開催致します。本ミュージアムレターをご覧頂ければ、学習院の起源が東京ではなく、京都にあることがおわかりになると思います。そして学習院という名前の由来もそこにあり、学習院に関する理解を深めて頂けることになると思います。それだけでなくNHKの大河ドラマで幾度となく扱われた幕末の志士達との意外な関連もご理解頂けて、楽しんで頂くことができると思います。また史料館展示室ではゆかりの多くのものが展示され、関連講座では興味深いお話があり、皆様方に楽しくご参加頂けることと思います。皆様にはこれらを通じて、史料館員達の熱い思いや活動を身近に感じて頂ければ幸いです。

最後になりましたが、この展示および史料館講座開催にご尽力、ご協力いただきました関係各位に心よりお礼を申し上げます。
(館長 上田隆穂)

幕末京都の学習院展 —公家たちの挑戦、志士たちの夢

明治10年(1877)に開校した学習院は、その名を幕末、弘化4年(1847)に京都御所内で開校した公家のための教学の場であった「学習院」学問所より引き継いでいます。引き継いだものは「学習院」という学校名の他、その名を記した「勅額」や当時の教科書である漢籍・和書もあります。その漢籍・和書からは当時の公家達が自ら学問をしないと欲した、強い気持ちを見て取れることが出来ます。

幕末の政治状況の中、京都学習院は一時期長州藩などの志士達の政治的空間にも利用されました。志士たちはここで朝廷との繋がりを持ち、未来を論じて、そして去っていきました。

今まで歴史の中に埋もれていた、幕末京都の学習院ゆかりの品々を一堂に会した展覧会です。皆様是非、幕末の公家たちの挑戦、志士たちの夢をご覧ください。

(学芸員 長佐古美奈子)

「幕末京都の学習院」展は、一般社団法人霞会館
のご協力により開催しております

幕末京都の学習院

本稿では、幕末の京都に設置された、公家の教育機関である学習院の概要を記しつつ、学習院の設立が公家社会にどのような影響を与えたのか、その歴史的意義を明らかにしていこう。

学習院については、本多辰次郎氏や大久保利謙氏の研究に詳しい。すなわち、天保13年(1842)10月1日、仁孝天皇の意向によって、学習院の建設が、江戸幕府へ申し入れられた。その目的は、困窮した堂上公家の乱れた風紀を糾すためであったという。その後、老中水野忠邦から許可があり、弘化2年(1845)11月27日、学習院伝奏に三条実万、学頭奉行に勘解由小路資善・東坊城聡長らが任命され、開講の準備にあたった。そして、同3年5月、禁裏御所建春門の外に所在した開明門院の跡地に講堂が竣工され、翌年3月9日に開講の運びとなったのである⁽¹⁾。

学習院の設立に際しては、学頭勘解由小路資善・東坊城聡長が作成した学則が定められた。すなわち、

学則之事 履聖人之至道 崇皇国之懿風
不誦聖經何以修身 不通国典何以養正
明弁之務行之

とあり、儒学を学ぶことで身を修め、和書を明らかにすることを通じて正道を実践できるのだ、という趣旨は対句になっており、両方そろってはじめて学問を行えるのだという漢魂和魂を基礎としていることが明らかである⁽²⁾。

では、学習院の学則が、講義等にどのように反映したかという点、学習院では、漢籍をテキストとして講師が講義を行う「御会」(以下では、漢書会と称す)が、毎月9がつく日に月3回開催されたところから始まった。そして、和書をテキストとする「和御会」(以下では、和書会と称す)が開講されたのは、嘉永2年(1849)からで、毎月26日に月1回開催された⁽²⁾。

漢書会・和書会において、講師をつとめた人物は表に記す通りである。特に、漢書会の講師には、当該期の京都で著名な儒学者が就任した。また、和書会の講師には、文久2年(1862)閏8月、宇都宮藩の建議によって始まった文久の修陵事業において、中心的な役割を果たした山陵考証学者谷森善臣が就任していたことが特徴として挙げられよう⁽²⁾。

開講に際しては、「学習院条目」が定められ、聴衆は、堂上・地下などを問わず、15才以上40才以下の者とされた。ただし、40才以上でも希望者は参加できた。

また、漢書会の出席者や人数を検討していくと、年齢層は20代から30代が中心であり、開講してから嘉永2年までの堂上の聴衆は、60人から70人程で、非堂上人の聴衆は、10人から20人程であった。しかし、文久期以降、出席者が極端に減少した。堂上については、出席者が半分以上となり、少ないときは、10人以下であった⁽²⁾。この原因については、文久2・3年の一時期、学習院の講堂が政治的な空間として利用され⁽³⁾、講義が開講されることが少なくなったからだと考えられる。すなわち、当該期の政治状況の急激な変化が、学習院の実態にも反映し、文久期以前と以後とは、学習院の果たす役割に何らかの変化が生じたことが考えられよう。



歴史科教授用参考掛図
仁孝天皇(左 明治43年)・孝明天皇(右 明治44年)



学習院学則(弘化4年 学習院大学図書館所蔵)

最後に、学習院設立の意義について考えたい。近世後期の公家社会には、漢籍や儀式書・六国史をテキストとして、縁戚関係や交際関係でつくる、いくつかの勉強会が開催されていた。特に、光格天皇や仁孝天皇が主催した「御会」(天皇の御前で、近臣らがテキストを会読する)に参加した公家は、「御会」に参加する公家同士や、講師を招いて熱心に予習のための勉強会を行っていた。以上のような近世後期の公家社会における勉強熱の高まりを背景にして、学習院が設立されたのである。

そして、学習院の設立によって、講堂という「場」がつくられ、学習院に出席する公家は、同じく講師から講義をうけることで、門流や家格にとらわれずに学べたのである。また、現実的な政治問題までを視野に入れた講師から講義を受けることで、互いに刺激しあいながら連帯の意識を形成させていった。すなわち、幕末に学習院が設立された意義とは、近世後期に分散していた公家の勉強会が、一つの「場」に集約されたことにある⁽⁴⁾。

(公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会
学芸員 佐竹朋子)

注

- (1) 本多辰次郎「学習院創建及其沿革」(『史学雑誌』26巻4号、1915年)。大久保利謙「幕末京都の学習院」(『明治維新と教育』吉川弘文館、1987年)。
(2) 拙稿「学習院学問所の果たした役割」(朝幕研究会編『近世

- の天皇・朝廷研究 第2号—第2回大会成果報告集—」学習院大学人文科学研究所、2009年)。
(3) 家近良樹「幕末期の朝廷に新設された国事審議機関について」(『日本歴史』448号、1985年)。
(4) 拙稿「学習院学問所設立の歴史的意義」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第2号、2003年)。
(付記) 中嶋諒氏から貴重なご意見を賜った。感謝申しあげる。



現在の京都御所学習院跡

□ 漢書会講師一覧表 (大久保利謙「幕末京都の学習院」、笠井助春「近世藩校に於ける学統学派の研究」(吉川弘文館、1969年)から作成)

名前	就任時期	退任時期	出仕名	身分	学派
寺島俊平	弘化4年6月	(嘉永2年)	藤原天祐	九条家家臣	—
岡田六蔵	弘化4年6月	(嘉永3年)	源亀	—	岩垣龍溪門下
牧善輔	弘化4年6月	文久3年	藤原靱	—	頼山陽門下
大沢雅五郎	弘化4年6月	文久3年7月	藤原敬邁	—	鈴木恕平門下 →山口菅山門下
中沼了三	弘化4年6月	休会まで就任	藤原之舜	(父は医者中沼養親)	鈴木恕平門下
合谷三吉	文久3年2月	休会まで就任	劉霧	—	広瀬淡窓門下
梅辻平祐	慶応元年2月	休会まで就任	祝部更張	妙法院門室儒士	—
貫名右近	慶応元年2月	休会まで就任	藤原祁	一条家儒士	—
秋田稲人	慶応元年2月	休会まで就任	源晴	—	—

□ 和書会講師一覧表 (『学習院仮日記』(宮内庁書陵部所蔵)から作成)

名前	就任時期	退任時期	出仕名	身分	学派
小泉将曹康敬	嘉永2年2月	嘉永5年6月	坂上康敬	三条西家外記	本居大平門下
勢多大判事章武	嘉永5年6月	安政5年5月	中原章武	地下官人	—
谷森善臣	安政6年5月	休会まで就任	平種泰	三条西家外記	伴信友門下
出雲路定信	安政6年5月	休会まで就任	齋部定信	下御霊神社神主	—
樹下茂国	(文久元年)	休会まで就任	祝部茂国	日吉神社神官	—

学習院大学所蔵漢籍から見る 京都の学習院の教育

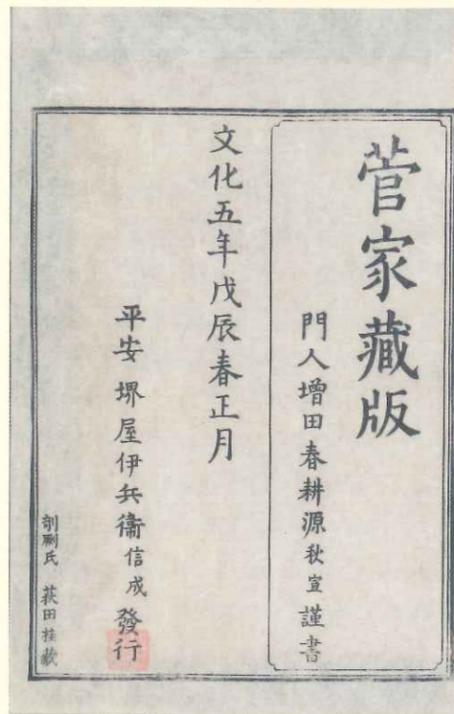
幕末京都の学習院では、弘化4年(1847)の開設の当初から、「御会」と呼ばれる講義が行われていた。御会の会日は毎月9の日、すなわち9日、19日、29日であり、当日は辰刻(午前8時頃)より巳半刻(11時頃)までが講釈、午半刻(午後1時頃)より申刻(4時頃)までが読書に充てられた。講釈とは、講師による講義のことで、平素は経書(儒教の經典である四書五経)のうち1冊が選ばれ講じられた。また読書とは素読、輪読指導のことで、読師(講師と同じ人物が務めた)の他に、院内の庶務にかかわる雑掌が補佐した。なお嘉永2年(1849)より国書の講義、すなわち「和御会」が開講されるにあたり、漢籍の講義である御会は、それと区別して、「漢御会」と称されるようになった。

それではこの「御会」(漢御会)では、具体的にどのような書物が用いられたのであろうか。いま学習院大学図書館には、実際の講義でも用いられたと思しき京都の学習院の旧蔵書が1,500冊以上収められている。そもそも京都の学習院は、古代の大学寮の再興を意図して建てられたといわれるように、その旧蔵書にも、古来学問の家として名高く、かつて大学寮の教官(博士)をつとめた菅原氏、清原氏にかかわるものが含まれている。ここではそのいくつかを紹介してみよう。

五条為徳校『御注孝経』

弘化3年(1846)10月、五条為定により奉納された『御注孝経』30部のうち、いま学習院大学図書館は27部27冊(114/11~37)を収める。内題下部に「参議従二位行右大弁兼長門権守菅原朝臣為徳校」、刊記に「菅家藏版……文化五年戊辰春正月/平安塚屋伊兵衛信成發行」云々とあることから、五条家(本姓は菅原氏)の家藏本を、文化5年(1808)五条為徳が校勘し刊行したものと分かる。なお五条為定は、為徳の実子である為貴の養子にあたる。

弘化4年3月9日、学習院の開講日には、東坊城聡長による『御注孝経』の講釈が行われた。そもそも聡長は、五条為徳の三男に生まれ、のち東坊城家の養子となった人物であるから、おそらく聡長が講釈に用いたのも該書であったと推測できる。為徳の功績、さらにいえば五条家(菅原氏)の家学を明らかにするという意図のもと、為定は該書30部を学習院に奉納し、聡長はそれを講釈したのであろう。



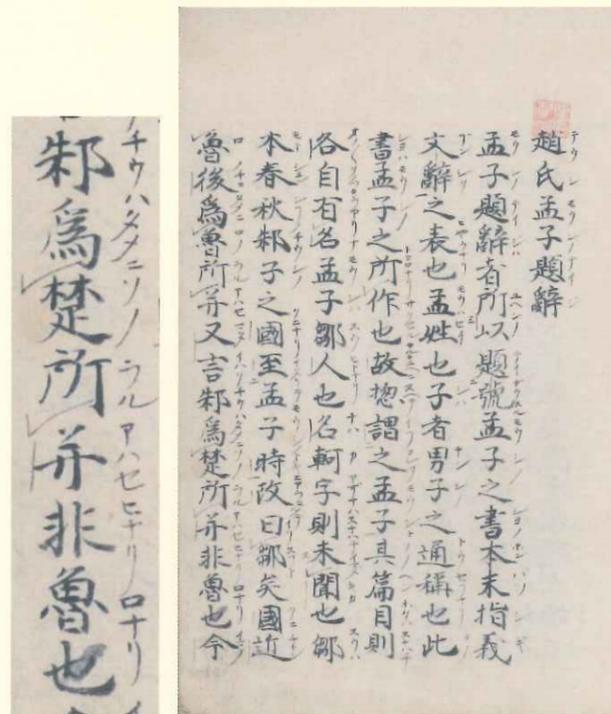
『御注孝経』(学習院大学図書館蔵)

『古文孝経』・『孟子』

明確な刊記、奥書等の情報は無いが、そこに書き込まれた内容などから、両書ともに、清原氏と何らかの関わりがあると考えられるものである。

まず『古文孝経』(114/49)は、経文のほとんどの箇所、逐一返り点と送り仮名、振り仮名等の書き込みのあることが注視されるが、最終章である「喪親章第二十二」のみ、一切の書き込みがない。清原氏中興の祖宣賢(1475~1550)は、その著『孝経抄』において、「此章(喪親章)ハ凶会タルニ依テ、古来、文字読ヲモセズ又講説モセズ」云々と、親への服喪という凶事については取りあわないという立場を貫くが、これは該書の態度と軌を一にするとと言えるであろう。

また『孟子』(112/87)は、刊本であるが、巻頭に「趙氏孟子題辞」が補写されており、そこに見える一句「邾為楚所并非魯也」が注目される。その「非魯也」は、「魯ニ非ザルナリ」と読むのが常であるが、該書はここに「ヒナリロナリ」とある。これは相当珍妙な読み方であると言わざるを得ないが、宣賢自筆の『孟子抄』に「非也ト読ベシ」などあるように、これこそ宣賢の訓読であった。さらに「清原」の白文方印(右頁中央の写真の右上部)が捺されていることは、かつて該書が清原氏の蔵書であったことの傍証となる。



『孟子』(学習院大学図書館蔵)

蔵書印「学習院印」

京都の学習院の蔵書印。京都の学習院の旧蔵書は七千余冊が現存し、学習院大学図書館のほか、京都府立総合資料館、国立公文書館(内閣文庫)、宮内庁書陵部などに収められるが、そのいずれにも右の蔵書印が捺されている。

(客員研究員 中嶋諒)

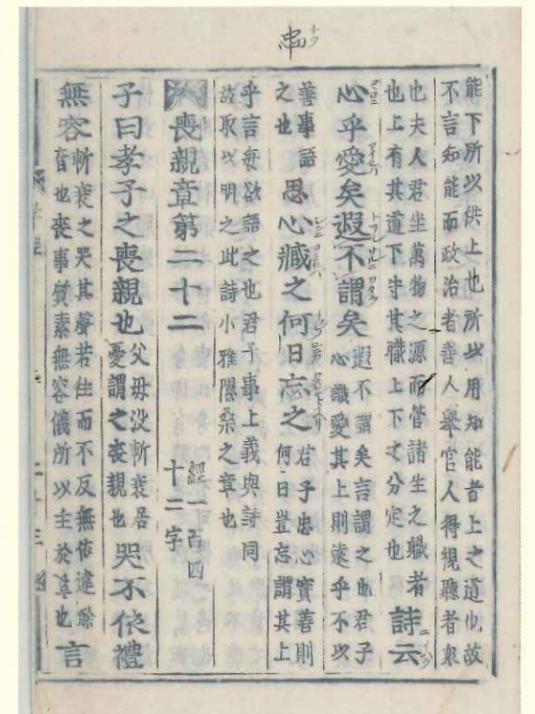


*ウェブサイト「学習院大学デジタルライブラリー」では、以上で挙げた漢籍3点を含め、学習院大学図書館所蔵の京都の学習院の旧蔵書が画像公開されています。 <http://glim-els.glim.gakushuin.ac.jp/>

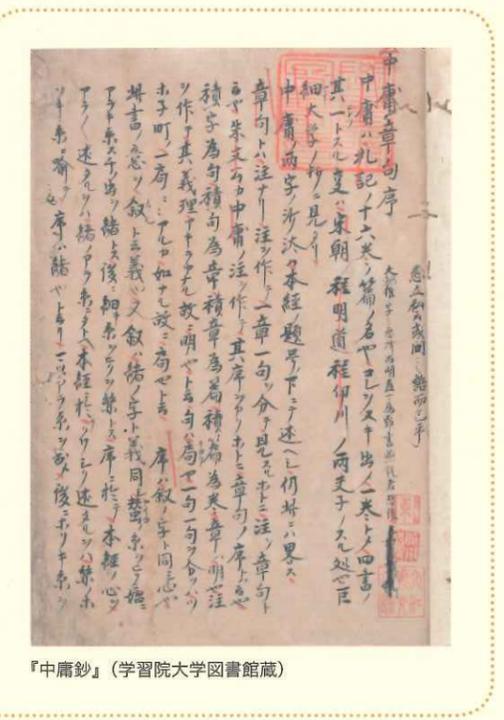
〔コラム〕慶長十九年写『中庸鈔』ほか

学習院大学図書館には、京都の学習院の旧蔵書ではないが、他に清原氏資料を二点所蔵している。これらは慶長19年(1614)写『中庸鈔』1冊(112/53)と、江戸前期写『大学抄』1冊(112/43)である。これらはかつて阿部隆一氏「本邦中世に於ける大学中庸の講誦伝流について—学庸の古鈔本並に邦人撰述注釈書より見たる」(『斯道文庫論集』第1輯、1962年3月、所収)によって紹介され、とりわけ前者は、この書の撰者が清原宣賢であることを確定する奥書を有することが特筆されている。いずれも清原氏の家学をいまに伝える貴重な資料である。

(中嶋諒)



『古文孝経』(学習院大学図書館蔵)



『中庸鈔』(学習院大学図書館蔵)

京都の学習院の丁祭と論議

「丁祭」とは、毎年陰暦2月、8月はじめの丁の日に
行う祭儀。儒教の祖である孔子を祀る式典で「釈奠」
とも称するが、京都の学習院では、幕府をはばかって
この名を用いた。現在でも丁祭（釈奠）は、孔子の故
郷である中国大陸では言うに及ばず、湯島聖堂（東京
都文京区）や足利学校（栃木県足利市）、多久聖廟（佐
賀県多久市）など日本各地で目にすることができる。

京都の学習院では、嘉永3年（1850）2月に初の丁
祭が挙行された。その詳細は、当館所蔵の「丁祭記」
などに詳しく、当日には祭儀に先立って「論議」と称
する「経書」（儒教の経典）にかんする公開討論も行わ
れたのだという。

それではこの「論議」には、どのような人物が参与
していたのでしょうか。上掲「丁祭記」などによれば、
その列席者は、東坊城聡長や五条為定、また舟橋在賢
など菅原氏、清原氏の末裔であった。両氏は古より学

問の家として名高く、大学寮の教官（博士）を輩出し
てきた歴史を持つが、再びこの学習院において彼らに
活躍の場が設けられたことは、特筆に値しよう。

（中嶋諒）



丁祭記（嘉永3年～安政4年）

【コラム】湯島聖堂の釈奠

湯島聖堂は、徳川5代将軍綱吉によって建てられた孔子の廟である。
元禄4年（1691）に竣工し、同年2月には釈奠が行われている。京都
の学習院の丁祭で用いられた器物の存否は不明であるが、湯島聖堂伝
来のものは、現在、東京国立博物館などに保管されている。これらは、
当時の祭儀の様子をいまに伝える貴重な資料といえるだろう。

（中嶋諒）

- ・爵：「爵」は「酌」と同じで、酒がくまれる器のこと。「玄酒」（清めた水）
が注がれた。
- ・象尊・犧尊：「尊」は「樽」と同じで、酒を入れる樽のこと。魔除け
の動物とされる象や牛（「犧」は牛のこと）がかたどられた。



牡丹唐草金銀象嵌燭台
（元禄2年 前田綱紀献納）



爵（左・中 安永4年 井伊直幸献納）
（右 安永3年 相良長泰献納）

象尊（安永4年 保科容頌献納）

犧尊（安永4年 保科容頌献納）

（いずれも東京国立博物館所蔵）Image: TNM Image Archives

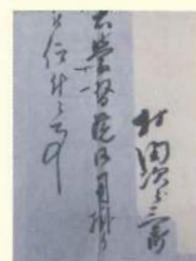
恐れ入りますが、画像の閲覧をご希望の方はミュージアムレター本紙をご覧ください

志士たちが集う学習院

安政5年（1858）、安政の五カ国条約調印を巡って朝
廷と対立した幕府は、その融和を図るため和宮降嫁を
行い、公武一和への舵を切った。一方朝廷は薩摩藩・
長州藩に対して様々な政治勢力を取り結ぶ「周旋」を
命じることになるが、長州藩への周旋勅命は学習院で
行われている。

文久2年（1862）正月、初めて長州藩の関係者が学
習院を訪れた。徳山藩主毛利元蕃が長州藩主毛利慶親・
世子定広の代理として年頭祝儀の挨拶に伺候したの
である。次は同年7月、長州藩主慶親が議奏と武家伝奏
に面会した。この際、江戸に下った勅使大原重徳に出
された周旋事項が貫徹するよう長州藩でも周旋するよ
うにとの命を賜った。この周旋事項の事を長州藩では
「学習院御用」と呼び、それに従事する者を「学習院御
用掛」と呼んだ。学習院御用掛には、桂小五郎や高杉
晋作、久坂玄瑞、周布政之助など、有名な幕末の志士
たちがその名を連ねている。右上の写真は、長州藩政

の改革に尽力した村田
清風の息子、次郎三郎
が学習院御用掛に任命さ
れた際のものである。こ
れ以降、長州藩の人々は
度々学習院を訪れて武家
伝奏や議奏、あるいは国
事御用掛や国事参政な



（学習院御用掛仰付らる事）
（文久2年 村田清風記念館所蔵）

どといった武家とのパイプ役になる公家たちと面談を
行った。さらに文久3年2月、朝廷は草莽の志士たち
が学習院に於いて時事を建言することを許可した。こ
れによって学習院は志士らの朝議介入を許す窓口とし
て広く開かれたのである。

しかし同年8月18日、八月十八日の政変が勃発し尊
攘派の長州藩士らが京都から追放された。これにより
学習院は再び落ち着きを取り戻していった。

（E F 共同研究員 橋本佐保）



『三条実美公履歴』（明治40年）

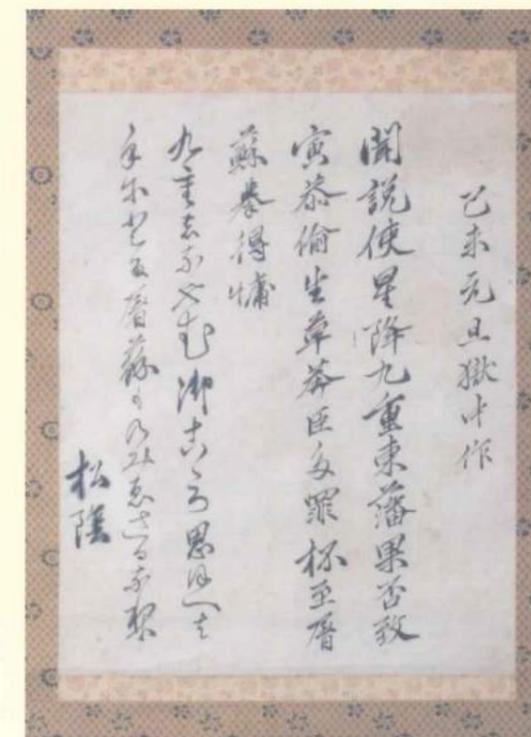
【コラム】吉田松陰「己未元旦獄中作」

吉田松陰が、自らの没年でもある安政己未（6年/
1859）の元旦に、獄中で詠んだとされる漢詩（七言絶句）
と和歌。いずれも年頭に飲む屠蘇を手にしながら、獄中
で何をするでもない我が身の不甲斐なさを嘆いている。
「九重」とは、大空のことを指すが、ときに天子の住ま
う宮殿のことをいう。ここで松陰は、天皇が蔑ろにされ
ている当時の情勢を憂えているのである。

（中嶋諒）

己未元旦獄中作 己未の元旦 獄中に作る
聞説使星降九重 聞く説らく 星をして九重より降
らしむるを
東藩果否致寅恭 東藩 果たして寅敬を致すや否や
倫生草莽臣多罪 生を倫む 草莽の臣 罪多し
杯至屠蘇拳得鄙 杯 屠蘇に至るも 拳げ得て鄙し
九重の なやむ御こゝろ 思ほへば
手にとる屠蘇も のみゑざるなり
松陰

○平声 ●仄声 ◎押韻（上平声・冬韻）



吉田松陰「己未元旦獄中作」（安政6年）

のぎまればすけ 京都の学習院と乃木希典

第10代学習院長乃木希典は京都の学習院に関する資料をいくつか遺している。その中から乃木希典筆「学習院学則」と座田維貞著・乃木希典再刊『国基』を紹介したい。

乃木希典筆「学習院学則」は、同じ形状のものが二点ある。一つは文章をそのまま書写しているが、もう一つは「履聖人之至道」と「崇皇国之懿風」とを入れ替えて皇国を崇ることを第一として書いている。天皇への至忠を貫いた彼らしい一品と言えよう。

学習院学則の根本的思想は『国基』に基づいていると考えられている。座田は学習院雑掌で、実務に長けた官人でありながら儒学と国学を兼ねた学者として知られていた。『国基』は政治や学問などの国の特質を風土や自然から説く水土論によって、国体の独自性と主体性を説いたもので、当代に限らず昭和前期にいたるまで思想的な影響を与えた。乃木は明治40年代初めに儒学者山鹿素行の著書を私費で次々に出版しているが、その流れの中で同43年に『国基』を再刊した。また翌年には学習院で『国基』についての講義を行っている。乃木が京都の学習院の教育と座田の功績を高く評価していた事がうかがえる資料である。

(橋本佐保)

※公家の名の読み方は、本誌では『雲上明覧大全』（『近世公家名鑑編年集成』終風社）などに依った。

※特に注記のない画像は当館所蔵資料である。

学習院大学史料館からのお知らせ

平成28年度春季特別展 「幕末京都の学習院」展

【主催】学習院大学史料館 【共催】霞会館

【協力】史跡足利学校、東洋文庫

学習院総務部、学習院アーカイブズ、学習院大学図書館、
学習院大学文学部史学科

【会期・会場】

●平成28年4月2日(土)～5月28日(土)

開室：月～土曜 10:00～17:00

閉室：日曜・祝日

(ただし4/3(日)・4/17(日)開室)

●北2号館1階 学習院大学史料館展示室

●入場無料

●ギャラリートーク ①4/17(日)「京都学習院の漢籍」中嶋諒

②5/21(土)「京都学習院の生活」橋本佐保

いずれも14:00～展示室内

【関連講座】

第79回学習院大学史料館講座

「京都の学習院—公家・幕府・藩の動向と関連させて—」

日時：5月7日(土) 14:00～15:30

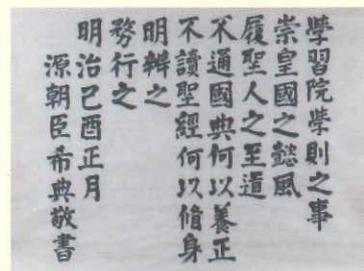
会場：学習院創立百周年記念会館正堂

講師：家近良樹先生(大阪経済大学経済学部教授)

*入場無料 事前申し込み不要



第10代学習院長乃木希典



乃木希典筆「学習院学則」
(学習院アーカイブズ所蔵)

□ 幕末京都の学習院 年表

安永 8年(1779年)	光格天皇即位 学問所設置をのぞむ
文化 14年(1817年)	仁孝天皇即位
天保 13年(1842年)	朝廷側から幕府へ学問所設置を要請
弘化 2年(1845年)	幕府が朝廷側の要請を了承
弘化 3年(1846年)	孝明天皇即位 学問所講堂の完成 「学習院条目」が定められる 書籍の下賜・寄贈 その他調度・備品の用意
弘化 4年(1847年)	学問所開講
嘉永 2年(1849年)	勅額「学習院」下賜(「学習院」の名称の公定)
嘉永 6年(1853年)	ペリー 浦賀に来航
安政 5年(1858年)	日米修好通商条約 調印
文久 2年(1862年)	長州藩等の尊攘派の参集所として 学習院が利用される(学習院御用掛設置)
文久 3年(1863年)	八月十八日の政変 尊攘派京都から一掃される
慶應 3年(1867年)	王政復古の政変
明治 元年(1868年)	学習院が大学寮と改称 皇学所・漢学所が併設される
明治 2年(1869年)	皇学所・漢学所廃止 京都大学校として開講
明治 3年(1870年)	京都大学校が京都府に移管し京都府中学校となる 学習院の最終的な閉幕

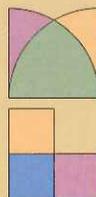
ミュージアム・レター第31号

2016年4月1日発行

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(5992)1173

FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>